
恋唄

恋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋唄

【Nコード】

N3286Y

【作者名】

恋夢

【あらすじ】

『あたしの恋はきつと、片思いよりも遠い恋』 既婚者の現役教師に恋をした。それは、届くはずのない想い。気持ちが大きくなればなるほど、胸がぎゅっと締め付けられる。 そんな恋を、したことがありますか？ 狂おしい程に愛おしい。 そんな気持ちになったこと、ありますか？ 『先生。あたしね、 』 苦しいくらい青春を貴方に。

01・届く気がしない(前書き)

久しぶりに真っ直ぐな小説を書きます(笑)

この物語は、「恋したくなるお題 配布」サイトの「遠すぎる恋」のお題を元に作成しております。

こちらのサイトのお題は、どれも素敵なお題なので、皆さん是非覗いてみてください。

<http://members2.jcom.home.ne.jp/seiku-hinata/index.html>

01・届く気がしない

めいっぱい手をのばす。

それでも、つかむことはできない。

あたしの求めているものは、とても遠い。

*

「槇」

「何、」

「好きだ」

「しね」

ひでえなー、と目の前の男が呟く。

酷いのはどっちだ。

友達だと、思っていたのに。

「まーき」

「…な」

「好きだ」

「やめて」

自分の声が一段と低くなったのを感じた。

目の前の男が、傷ついた顔をした。

…ああ。

そんな顔、しないでよ。

あたしは、アンタを傷つけたい訳じゃないんだ。

違っんだ。

「槇、」

「…っごめん」

「槇！待てよ、俺の話、聞けって、」

「やだ！」

がしつと男らしい手があたしの腕を掴んだ。

そのとき初めて、コイツが男だったと認識する。

あたしは、友達だと、思っていたのに。

こいつは、どんな目で、あたしを見ていたの？

こいつは、何を思って、あたしと喋っていたの？

「まきっ」

「アンタなんか、だいつきらい！」

言い終えてから、後悔の波があたしを襲った。

あたしの腕を掴んでいた手の力が弱くなる。

もう、後には引けなかった。

「…ッサヨナラ」

あたしが苦し紛れに残した言葉は、重石になって地面に落ちた。

*

槇原汐十六歳^{まきはらしお}

絶賛青春中。

女子からはろくでなしと噂され、男友達からは裏切られ。

そんなどうでもいい毎日。

あたしは、女子と仲良くなれない。
気が合わないから。

恋バナとかできないし、服装やメイクにも興味がない。
ましてや読書とか音楽とかそういうものにはとんと疎い。

あの娘達とあたしは、別次元に住んでいるとしか思えないのだ。

そんなあたしが行き着いた先は、男のところ。
くだらないことを喋って、げらげら笑って。

スポーツは出来ないし興味もないけど、誰かが頑張っている姿を
見るのは気持ち良かった。

男の子と友達になれたらいいなって、そんな淡い幻想を思い浮か
べた。

…いつからだ。

いつから、男共のあたしを見る目が変わった？

『好きだ』

『友達としてとか無理だよ。だってお前可愛いじゃん』

『付き合ってくれねえかな』

『男と友達になるとか、色恋沙汰以外の何物でもないだろ。笑わせ
んな』

男女の友情は駄目なの？

恋愛感情には発展しない「好き」は駄目なの？

ねえ、それならあたしは、どうすればいいの？

わかんない。

わかんないよ。

「おや」

あ。

…やだ、どうしよう。

彼だ。

「槇原さん」

「…何よ」

「教師にタメ口とはいい度胸ですねえ」

うつうつるさい。

胸の鼓動も、先生も、みんなうつるさい。

みんなみんな、消えてしまえばいい。

「何でしょうか先生様様」

「槇原さんが敬語だと怖いですよ」

「…あたしに何を求めてんのよ」

意味、分からない。

でもそれは、さつきみたいなきな嫌な気持ちじゃない。

「先生」

「何ですか」

「あたし、先生のこと好きです」

先生の眼鏡の奥の目がすーっと細くなる。

ああ。

これは地雷か？

「冗談ですか。僕は既婚者ですよ」

「うん。冗談。笑える？」

「笑えませんか。全く、槇原さんは」

先生は、あたし以外の人にも優しくするの？

先生は、あたし以外の人が落ち込んでいても慰めてあげるの？

先生は、奥さんに、あたしの知らない先生を見せているの？

「あたしだからこそその冗談でしょ？先生なら、そのくらい分かるよね」

「分かりませんよ。僕には、冗談と本気の区別なんてつきません」

先生。

あたしが、さっきの告白、冗談じゃないって言ったらどうする？

その細い目を更に細めて、驚く？たじろぐ？戸惑う？

それとも…、無反応？

それだけは嫌だ。

先生は結婚していて、幸せな家庭を築いていて、可愛い奥さんも居て。

そんなのは分かってるけど、でも、あたしは、きっと。

先生のこと、この世界で一番考えてるよ。

*

柏木祐紀^{かしわぎ ゆうき}二十八歳。

絶賛幸せ中。

女子生徒からは優しいと言われ、男子生徒からはゆるくて可愛い

と言われ。

そんなどうでもいい毎日…なのかは置いておき、結構人気のある先生は、英語の教師だ。

それと、結婚してる。

どうでもいいけどね。

そんなこと関係ないんだよ。

好きになってからじゃ遅いんだよ。

この気持ち、彼に届く気がしない。

「どうせ、届ける気もないんだけどね」

学校の屋上で何を言ってみても、どうせ誰にも聞こえやしない。だから大声で叫んでしまえばいいものを、そんな祐紀はないから、小声でぼそつと呟く。

こんなときだって、あたしは素直になれない。

先生と一緒にいることが耐えられなくて、あの場から逃げ出してきた。

あたしはいつも、逃げてばかりだ。

「あーあー。あたしが、もっと早くに生まれていたらなあ」

そういう問題じゃない、それは分かってる。

でも、どうしてもそう考えてしまうのだ。

もし、先生の奥さんよりも、あたしが先に生まれていたら？

もし、先生の奥さんよりも、あたしが先に先生に出会っていたら？

もし、先生の奥さんよりも、あたしが先に先生に恋をしていたら？

…くっだらない。

我ながら馬鹿だ。

ホント、馬鹿だよ。

いつか、先生の奥さんに会いたい。

そして復讐を、とかそういうわけでは決してないけど。
ただ、一言伝えたいのだ。

『貴方はとても幸せなんですよ』って。

あたしは、彼を見つめることすら許されない。

見つめることが許されるのは、授業中だけ。

彼を独占することはおろか、彼と話すことさえ憚られる。

それなのに、奥さん。

貴方は毎日、先生と見つめ合って、先生と喋って、先生を独り占めしているんでしょう。

そんなの、ズルい。

あたしだって先生のこと好きなのに。

あたしの方が、先生のこと、幸せに出来るのに。

でも、仕方がないのだ。

だって、先生が愛したのは、あたしじゃない。

年とかの問題じゃない。

顔とかの問題じゃない。

あたしか、奥さんかの違いだ。

あたしは奥さんじゃないし、奥さんはあたしじゃない。

だからあたしは、ほとんど毎日先生の授業を受けられるし、奥さんはほとんど毎日、一緒にご飯を食べたりできる。

それでも、傷ついているのは、きつとあたしだけだよな？
奥さんは幸せなんだよね？

先生は……、幸せ、なんだよね……？

「……あーあ。みんなみんな、消えちゃえばいいのにね」

そうすれば、この気持ちも、少しは楽になるのに。

空が青いよ、先生。

ねえ、この空を、先生もどこかで見てる？

この空で、あたし達、繋がってる？

あたしの恋はきつと、片思いよりももっと遠い恋。

01・届く気がしない(後書き)

十話完結です。

誤字脱字ありましたらどうぞ。

02・呼び止めておきながら

「まーきい」

「…お。たかのんじゃん」

目の前にいきなり現れたド派手な金髪。

いろいろやつたりやられたりして凹凸が激しい顔が、のそつとあたしの目に飛び込んでくる。

いつ見てもこの髪は凄い色だな。

「俺のことたかのんとか言う阿呆は、禿くらいしか居ねえよ」

「たかのんはたかのんだし。今更高野君とか呼べないって」

「それは言ってる」

くくつと喉の奥で笑うたかのん。

こんな敵つい面でも、笑うと案外可愛いのだ。

高野義幸^{たかのよしゆき}十七歳。

絶賛不良中。

女子からは恐れられ、男子からも恐れられ。

そんなどうでもいいであろう毎日を送っている男子高校生。

あたしよりも一個年上のくせに、餓鬼っぽくて何かと絡んでくる。不良共からは兄貴分として慕われている、らしい。

そういうあたしも、何か揉め事があったらたかのんに伝えに行くくらいだ。

「そーいやさ、槇、告白断ったんだってな」

「何で知ってんのよ、たかのん。っていうか、もうそんなに広まってるわけ？」

「いや？アイツが直接俺にいいに来たんだよ。振られましたっつてな」

「はあー？阿呆じゃん、何それ」

わざわざ報告？

しかもたかのんに？

別に、たかのんはあたしの彼氏でもなんでもないのに。

馬鹿みたい。

何を勘違いしてるんだか。

「……ねえ、たかのん」

「んあ？」

「たかのんは、あたしの前から居なくなったりしないよね？」

それは、脅迫でもあり、呪いでもある祈りの言葉。

あたしの前から居なくならないで。

ずっとあたしの側にいて。

あたしはたかのんのことを、異性として見ることはできない。

恋人になることもできない。

だけど、あたしの隣に居て欲しいの。

友達という立場で。

「……槇」

「たかのん。あたしね、怖い。いつか、友達がみーんな居なくなるのかもって」

だから行かないで。
たかのんだけは、あたしのそばに居て。

「俺は、友達じゃなきゃ駄目か…？」

「駄目。駄目だよ、たかのん。あたしは、たかのんと、友達で居たい」

あたしはたかのんの気持ちを知っている。

だからこそ、あたしは彼を突き放す。

だって、あたしは、たかのんに告白されたくないから。

告白されたら、あたしはきつと、いつも通り断ってしまうだろう。

そして、もう友達には戻れないのだろう。

失いたくないのだ。

これ以上、友達と別れたくない。

あたしは、たかのんと友達のままに居たい。

だから、そんな顔しないでよ。

あたしが、何か凄く悪いことをしているような気分になるじゃない。
い。

ねえ、そっちが先に、あたしに近づいたんでしょ？

そっちがあたしを呼び止めたんでしょ？

呼び止めておきながら、勝手に離れるなんて、そんなの勝手すぎるよ。

だから、あたしの隣に、ずっと居てよ。

「……そうか。……なら、仕方ねえよなー」

「うん。仕方ないよ、たかのん」

…先生。
胸が、苦しいよ。

*

ずきずきと痛む胸を押さえて、保健室まで走った。
たかのんが心配そうに『おぶってやるうか？』と言っていたけれど、それを無視して走った。

早く。

早く、薬をください。

この病に効く薬をください。

たたたた、とあたしの足音が廊下に木霊する。

なんでこんなに静かなんだろう。

…ああそつだ、今授業中だった。

「おいこら、榎原つ、授業受ける、廊下走んな！」

「早退しまあす」

「榎原あー！」

体育教師の叫ぶ声。

そんなの無視だ。

教室からざわざわという音がした。

多分、みんなが噂しているんだろう。

『不良生徒榎原汐、またもサボリ』だとかなんとか。

ざげんな。

「っ……痛い……」

胸が苦しい。
痛い。
もやもやする。

たかのんのせい？
そうかもしれない。
先生のせい？
そうかもしれない。
自分のせい？
…きつとそうだ。

たかのんに、はっきりと接することが出来ない自分が嫌い。
先生に、気持ちを伝えることができない臆病な自分が嫌い。

「あら、榎原さん？」
「え？…あ、先生」

ふと気づけば、保健の先生が、あたしの目の前に立っていた。
いつの間に…。
そう思って辺りを見渡すと、とっくに保健室に着いていた。
…ぼーっとしすぎたかも。

「どうかした？」
「あの…あたし、胸が痛くて」
「…むね？」

「はい。胸がずきずきして…お腹もきりきり痛むし…。病気かなあ」
保健の先生が、柔らかく微笑む。
あたしも、この人みたいになれたら。

きつと、女の子の友達もいっぱい出来て、普通に恋人ができるのにな。

どうして、こんなにひねくれた子になっちゃったんだろう。

「槇原さん、もしかして、好きな人できたんじゃない？」

「え？」

「あのね、人は、一生に一度、本気の恋をするって言われているよ。その恋は、楽しいだけじゃない。辛くて苦しくて、どきどきして…。とにかく、そういう現象が起こるらしいのよ」

一生に一度の。

本気の恋。

そうなのだろうか。

このあたしが？

あの先生に？

本気の、恋を？

違う、と思った。

あたしの恋は、あたしの先生に対する気持ちは、本気なんかじゃない。

一生に一度の恋なんかじゃない。

あたしの恋は、そこら辺に転がっているような当たり前の恋で、全然本気なんかじゃなくて。

だから、あたしは、先生に近づくことができない。

「…ねえ、先生」

「なあに、槇原さん」

あたし、よくわかんないんです。

どうしたらいいの？

何をしたら、あたしの恋は許されるの？

どうしたら、あたしは先生に近づけるの？

「どこからどこまでが、本気なんですか」

「ん？」

保健の先生が、かくつと首をかしげた。

「本気じゃないと、駄目なんですか」

「駄目って、」

「本気の恋じゃないと…近づくことは、許されないんですか？一歩も？」

「槇原さん？」

わかんない。

わかんない。

自分の気持ちがなんなのかさえも、
分からない。

「あたしの恋は、どうしたら、いいんですか」

ねえ、先生。

教えてください。

02・呼び止めておきながら（後書き）

あれですね、まきちゃんは純粹すぎてひねくれちゃったんでしょ
うね。

あとまきちゃんは自分勝手ですね、うん。

まあ青春なんてそんなもんじゃないですか？

03・無関心な横顔

保健室の白いカーテンが揺れる。

それを横目で見ながら、あたしはベッドに倒れ込んだ。

何でかな。

保健の先生に話したせいかな、少しだけ胸のずきずきが消えてなくなつた。

「横原さん、好きなだけゆっくりしていいね。私は、職員室に居るから」

「はい」

流れるそよ風があたしの頬に当たる。
うー。

爽やかすぎてあたしには痛いわ。

いきなりおかしいなことを言い出したあたしを見て、保健室のマド
ンナはほんの少し微笑んだのだった。

そういうところ、凄く大人っぽいと思う。

「ふあふ」

眠たい。

保健室って、こんなに気持ちのいいものだったんだな。

日溜まりの中のベッドがぼかぼかと私を包み込む。

あつたかい。
さつきまであんなに痛かった胸も、今は完全に落ち着いた鼓動を奏でている。

あたしは、保健室の真つ白な天井を眺めた。
そして、ゆっくりと瞳を閉じる。
おやすみなさい。

*

あたしを目覚めさせたのは、扉を開ける音だった。

「失礼します」

自分の耳を疑った。

だって、この声は。

え、なんで？

どうして、だって今は授業中、

え？

「槇原さん、居ますか？」

「いいいい居ますっ!？」

声が思い切り裏返った。

それでもめげずに、慌てて起きあがると、柔らかいほほえみがあったしを見つめていた。

先生：嘘、なんでここに？

「元気そうですね。養護の先生から、重症らしいと聞いて来たのですが」

「せんせつ、ちょ、なんでここに！？今は授業中なのに、」
「何言ってるんですか。今は休み時間ですよ。授業はさっき終わりました」

そ、そんなにあたし眠りこけていたのか…。

あ、っていうか寝癖とかついてないかな？

「スカートめくれ上がったくない？」

まさか寝言とか聞かれてないよね。

「それにしても、本当に驚いたんですよ。今まで僕の授業を一度もサボったことのない榎原さんが、教室に居なかったのですね」

だって、先生が教えてくれるからだよ。

先生じゃなきゃ、英語の授業なんてつまらなさすぎて耳にも入れられない。

あたしは、先生が英語の授業の担当だから、英語だけはテストの点数がいいんだ。

でも、休んだことで、先生がお見舞いに来てくれるなら、ちょっとくらいサボってもいいかも。

「だって、急に激痛が来たんだよ。あたしだってびっくりしたし」

「そうですね。大丈夫ですか？」

先生が、かがみ込んであたしの顔をのぞき込んだ。

…近い。

顔が熱い。

ここから逃げ出してしまいたい。

恥ずかしい。

それでも、あたしは先生の綺麗な瞳から目を離せない。

「だ、ただ大丈夫！少し寝たら、元気になったと、思う」「それは良かった。僕も心配したんですからね」

やめて。

やめてよ、先生。

これ以上甘い言葉を並べられたら、あたしは溶けてしまう。先生のせいで、溶けちゃうよ。

「先生、心配して、わざわざ保健室まで来てくれたの？あたし、嬉しいな」。誤解しちゃうかも」

いつもの調子で、なるべく軽い感じに言うと、先生はくすりと笑った。

ああ。

その笑顔が好きだよ。

先生が好きなんだよ。

「そうですね、榎原さんが心配だったというのもあるんですけどね。…実は、もう一つ、心配事があるんですよ」

え？

もう一つ、心配事？

なんとなく、胸が痛かった。

あれ、なんで？

もう治ったはずなのに。

なんでかなあ。

胸が、締め付けられているみたいだ。

「心配事って？」

「実はですね、もうすぐ生まれるらしいんですよ」

痛い。

胸が痛い。

この先は聞いてはならないと、警告ランプが頭の中で点滅している。

それでも、この好奇心には勝てなかった。

「生まれるって、」

「赤ちゃんが。僕の子供です」

女の子らしいですよ、と先生は、ものすごく幸せそうに笑った。

これが、親の顔か。

これが、先生の素顔か。

…そんなの、あたしに見せないでよ。

他の人のこと考えて、そんなに幸せそうに笑わないでよ。

どんどん、どんどん好きになりそうじゃない。

「奥さんが…先生の奥さんが、病院に居るってことですか」

「はい。それで、そろそろかなと思って、電話をしに保健室に来ました。ここには槇原さんしか居ませんし、槇原さんなら僕も安心ですし」

何が、何が安心なの。

あたしは、こんなにも胸が痛いのに。

先生は、どうしてそんなに幸せそうに笑っているの。

ねえ、いいの、先生？

あたし、その先生の子供が憎いよ。

奥さんよりも憎いよ。

羨ましいよ。

先生、ずるいよお…。

あたしに安心なんかしないで、信頼なんかしないで。

あたしは悪い子なんだから。

先生に信頼されたら、あたし、裏切ることなんかできないのに。

「……おめでとう、ございます」

「いや、まだ生まれてないかもしれないんだけどね。とりあえず電話してみるよ」

「は、い」

先生が、携帯電話を取り出して耳元に当てた。

そして、幸せそうな顔で会話をする。

『え、まだかい？そうかそうか、ごめんな、苦しい時間帯に電話なんかして』 『こっちは大丈夫だよ、心配しないで』 『生まれながらに呼んでくれよ。僕は気になってろくな授業もできないんだから』
先生の声が、あたしの耳に入って、そして出て行く。

先生の横顔が…あたしに無関心なその横顔が、どうしようもなく憎かった。

03・無関心な横顔（後書き）

結構いい感じのリズムで更新!!!!

04・幼稚な気の引き方(前書き)

えっと、言うの忘れていたかもしれないんですけど、たかのんはダブっていて槇と一緒にの学年です。

04・幼稚な気の引き方

「ちょっとアンタ、遅刻よ」

「知ってる。いつてきまーす」

「つたく、いつからアンタは不良になっちゃったのかしら……。お父さんお影響かしらねえ？」

「さーね」

朝、いつも通り、母の愚痴を聞きながら家を出る。

時間は九時。

完全遅刻。

でも、この時間帯の電車は空いているのだ。

それに、先生の英語の授業には間に合う。

「…あら、アンタ、」

「何、まだ言い足りないの、おかーさん？」

「んー……。汐、アンタ目の下腫れてるわよ」

「え」

昨日の夜、泣いて泣いて泣きまくった。

枕が涙でしっとり濡れるほどに、泣いた。

おめでとう先生。

そう言ってしまった自分が憎らしくて。

「失恋でもしたの？」

「つまさかー！じゃーねっ」

これ以上何かを言われる前に家を飛び出す。
ああ、あたしは今日も、逃げているのだ。

*

淡々と進む英語の授業。
今日は、その授業を真面目に聞く気になれなかった。
いつもは何とも思わない先生の顔を見ると、なんだか気持ち悪くなった。

先生は今、誰のことを考えているのだろう。
もうすぐ生まれる娘さんのこと。
頑張っている奥さんのこと。
それとも、他の誰かのこと。

そんなの、本当はどうだっていい。
ただ、あたし以外の人のことを先生が考えているという、その事実だけが嫌なのだ。
自分の中に、どす黒い嫌なものが渦巻いている。

「この問題は中間テストに出ますから、皆さんよく勉強しておいてくださいね」
「ええええーっ」
「せんせえの意地悪う」
「テストなんかやあだあー！」

先生の授業は基本緩い。
そのせいか、生徒達も、先生の前では本音をさらけ出している。
先生は、そんな生徒達を、にこにこ見ていた。

「はいはい、不満は後ほどゆっくり聞きますから、今はこの文章をノートに書いておきましょう」

「はあーい」

みんながノートを開くのを見て、あたしもそれにならう。

この文章、長くて覚えられそうにないな。

そんな平和なことを考えていると、教室の扉がいきなり、大きな音をたてて開いた。

みんなが呆気にとられてその音がした方向を見ると、そこにはたかのんが居た。

……え？

あたしは驚く。

…いや、あたし以外のみんなも驚いていた。

だって、たかのんが、英語の授業に来るなんて。

滅多に授業に出ないたかのん。

そんなたかのんでも、一日に一度は授業に顔を出す。

でもたかのんは、英語の授業だけには出ないのだ。

…理由は、分かっている。

それなのに、どうして？

「高野君。遅刻ですよ」

先生がのんびりと声をかける。

いつものたかのんなら、先生のこういった声は無視をする。

理由は……分かってる。

たかのんは、あたしの好きな人を、知っている。

「……テメツ、」

たかのんの低い声が教室中に響いた。

教室がざわめいた。

女子の悲鳴、男子のどよめき。

…え？

たかのんが、拳をぎゅっと握って振り上げている。

先生は硬直していて、クラスの間みなもそれにならって硬直。

あたしも、動けない。

なんで？

なんでたかのんは、先生を殴るの？

だってたかのんは、理由無しで人を殴るような男じゃないでしょ？

ねえ、どうしたのさ。

ねえ、たかのん。

ねえ。

「……！！……チツ、」

「……高野、君？」

先生から目を反らし、振り上げた拳を降ろすたかのん。

ひとまず安心するあたし達。

先生は、ぽかんとしたマヌケ面で、たかのんを見ている。

「……槇に免じて、今はやめとく」

「た、高野君、なんのことですか一体、」

「てめえのそういうところがうざったいし、苛つくんだよ!」

今日のたかのん、なんか変だ。

いつもなら、必要以上に先生と関わらないのに。

今日は自分から突っかかっている。

「高野君、とにかく一度落ち着いて、」

「うっせえ黙れ!…っくそ、埒があかねえ。おい槇、サボンぞ」

あたしの名前が呼ばれる。

反射的に席を立つあたし。

教室中の視線が、あたしに集まる。

「た、たかのん…?どうしたの?」

言いたいことをいろいろ押さえて絞り出した声。

その声は、自分でも分かるくらいに震えていた。

「どうしたもこうしたもねえよ!着いてこい、槇。じゃねーと、このくそ教師ぶっ飛ばすぞ」

たかのんからすつと目をそらし、先生を見る。

先生。

あたしを、見て。

……嫌だ。

やだ、やだやだやだ。

こっちを見てよ。

先生の視線は、たかのんに向けられていて。今はきつと、たかのんのことと頭がいつぱいで。それはきつと仕方のないことで、だけどそれがどうしても許せなくて。

あたしは、きつと唇を噛み締めた。

「……行く」

お腹のそこから出した声は、思ったよりも低く響いた。教室がざわめく。

我ながら、なんて幼稚な気の引き方だろう。だけど、しょうがないじゃない。

これくらいしか、方法が見つからないんだから。

「来いよ、槇」

誘うようにくいつと曲げられたたかのんの手。

その手に向かつて、足を一歩前に出した。

ちらつと一度先生を見る。

先生は、驚いたような顔であたしを見ていた。

恐ろしい程の自己満足が広がる。

…でも、駄目。

もつとあたしを見て欲しい。

残酷なまでの独占力。

それでもこれは、表に出してはいけない。

あたしは、先生の視線を背中に感じながら、教室を飛び出した。

04・幼稚な気の引き方（後書き）

遅れてすいません、テストでした。

これからもぼちぼち頑張ります。

05・誰に対しても同じ(前書き)

ペースが順調すぎて怖いです(笑)

05・誰に対しても同じ

一緒に街へ行つて暴れようというたかのんの誘いを丁寧に断つた。暴れたい気分じゃなかったから。だからあたしは、ここに居る。

「…変わんないなあ、ここ」

思わずひとりごとが漏れる。

確か、前にここに来たのは春だったか。

…そう、ちょうどここで、私は先生と出会ったのだ。

私は、大きな銀杏の木を見上げた。

*

『ねえ知ってる？』

『なになに、聞きたーい』

『あのね、隣のクラスの鈴木君と佐藤さんがね、』

『そんなことよりもさあ、昨日のテレビの…』

『やったあー、超ウケピーー！』

『何その“ウケピー”って！意味わかんないんですけどおっ』

…くだらない。

そう思い始めたのはいつだったか。

女子には、独特の世界観がある。

いつでもどこでも群れ行動、一匹狼なんて許さない。

女子の間では、そんな暗黙のルールがあり、それを守れない者は、自然とこの世界から落ちていく。

高校に入った始めの頃は、あたしだって上手くやっていたのだ。

グループに入るための手順だって分かっていたし、それなりに楽しく毎日を過ごしていた。

好きでもないアイドルグループの番組を毎日のようにチェックして。

見たくもない漫画を高い金出して買って。

どうでもいい隣のクラスの男子の話をして。

…疲れたのだ。

話を合わせるのも、楽しくないのに騒ぐのも、全てくだらないと思ってしまったのだ。

それでも、あたしは必死にグループの中で笑い続けた。

だって、いきなりグループから抜け出すなんて。

そんなの勇気も度胸もいるし、あたしには無理だ。

転機は、その年の冬に訪れた。

今では名前も覚えていないグループ内のリーダーだった少女が、自分の恋の話をしていた。

『わたしはねえ、今の彼氏と別れようと思ってるのー。だってさあ、飽きたしい』

これ自体はいつでもあることだ。

あたしや他の女子も、適当に相づちを打つ。

そんなとき、少女があたしの顔をじっと見て、にこっと笑った。

『ねーえ、槇。アンタさあ、わたしの彼氏と付き合ってみたら？』
は？

一瞬、その場の空気が固まる。
それから、へにやりと空気が溶ける。

グループの中で固まり続けているのは、あたしだけだ。

『……何それ、どういうこと？』

自分でも思ったより低い声が出た。

そんなことにも気づかない少女は、可愛らしく首をかしげてこう
言い放った。

『だってえ、彼氏がね、槇くらいの顔立ちの方がー、わたしなんか
と付き合うよりも楽だって言ったんだもん』

切れた。

音を立てて。

あたしの、堪忍袋の緒が。

『……んじゃないわよ』

『え？なあに、付き合ってみる？』

何で。

何で、あたしの価値を、アンタの彼氏に決められなければならな
いのだ。

わたしなんかと、って、何でアンタと比べられなければならない
のだ。

あたしくらいの顔立ちって何？

楽って何？

何それ、超笑える。

『っざっけんな！笑わせんじやないわよっ。あたしは、アンタの使
い捨てをへらへら笑いながら使いたくなんかない！あたしくらいの
顔立ちとか、意味わかんない！アンタなんかと比べられる筋合いな

いいし、アンタのくつだららない彼氏のために付き合っただけあげる気もないわ、馬鹿にすんな！」

少女が、一瞬だけ驚いたような顔をして、そして怯えたような表情になる。

『やだあ、槇ってばこわあい。なんで怒ったの？わたし、槇のためについて思っただけなのにー』

甘ったるい声を出して、近くの女子に話しかける少女。

…何が、槇のために、だ。

あたしのためを思って、そんなことが言えるなら、もっとあたしのことを考える。

アンタは、ただ単に自分を自慢したかっただけでしょ？

わたしは彼氏が居るけど貴方達には居ない、可哀想だから分けてあげる。

……あー、もう。

今まで、こんなくだらない会話をしてきた自分が憎い。

『もう一度言う。アンタから彼氏を分けて貰う必要なんてない。アンタのお古なんか使いたくない。アンタのくだらない彼氏なんか嫌だ。あたしの理想はもっと高い。なめんな。以上』

『……っな、何言ってるのよ!?!?』

どうせ、アンタが怒っている理由は、自分のためでしょう？

彼氏が馬鹿にされたことじゃなく、そんな彼氏を持っている自分が、馬鹿にされていると思ったからでしょう？

『サヨナラ。もうアンタ達とのくだらない会話に飽きちゃった。一抜けでごめん。じゃ』

我ながら、なんとあっぱれなお別れの挨拶。

でも、その少女は、自分を馬鹿にしたあたしを許そうとはしな

つたみたいだ。

次の日から、あたしはクラスからのけ者にされた。

無視してくれたことはある意味ありがたい。

でも、体操服や筆箱が盗まれるのは、正直とても困った。

村八分か。

そんなことを思っただけを日々を過ごして、あたしが高校二年生になったときには、そういつたいじめのようなものはほとんどなくなっていた。

そんなとき、あたしは先生に出会ったのだ。

一人で居ることに慣れてきた頃だ。

あの日、あたしはこの木の下に居て、彼もこの木の下に居た。

あたしはしかめっつらで、先生はにこやかな笑顔で。

でも、今ならわかる。

あれは、誰に対しても同じ笑み。

決して、あたしだけに与えられるものじゃないということが。

05・誰に対しても同じ(後書き)

槇ちゃんの過去について語っていたら、あっという間に字数が2000を超えてました。

私は2000文字を目安にしているので、今回はいろいろと誤算がありましたよ……。

ていうか下書き通りに進まない。
何故だろう。

06・続かない会話(前書き)

タイトル変更しました。

恋唄。

でも、本当のタイトルは『恋唄 - love song -』です。

06・続かない会話

「おや。こんなところに、人が居ましたよ」

まるで、誰かに語りかけているような、そんな口調で先生は言った。

「……アンタ誰。不審者？」

「ふ。なるほど、僕是不審者に見えるのですね。これからはもう少しきちんとした格好をしなければ」

「ふざけないで」

そのときあたしは、目の前の人物が新しくやってきた教師だということを知らなかった。

だから、目の前の笑顔の男が、少しだけ怖かったのだ。だけど、逃げ出すことは、あたしのちゃちなプライドが許さない。

「ふざけてなんかいませんよ。僕は、俄然本気です」

「アンタ、大人でしょ。あたしになんか敬語使うのやめたら」

あたしなんかに。

自分で言っただけで傷ついた。

本来ならば、私が敬語を使う立場なのだろうが。今はそんなことに構っている暇はない。

「“なんか”？なんか、とはかなり卑屈的ですねえ。まあ、敬語は

僕の癖なのでお気になさらず」

「…ほつといてよ」

「そうですね、どうしても気になるというのならば、僕は癖を直さなければいけませんよね。それは少し面倒なので嫌なのですが…」

駄目だ。

こいつには、あたしの言葉が通じていない。

会話が全く続いていない。

「で、結局アンタ何なの」

「僕ですか？僕は、柏木祐紀。この学校に新しく赴任してきた英語の教師です。ナイストゥーミーチュー」

目の前の男が、拙い英語で挨拶をする。

この男、本当に英語の教師か？

……柏木先生、か。

「ふーん。よろしくね、かしわ、」

「ちよつと待ってください。僕は名乗りました。次は貴方の番です。違いますか？」

にっこりと嫌味のない笑顔で先生は言った。

逆に苛つく。

「あたしは、榎原汐。男友達からは槇って呼ばれてる。女子からは男好きって噂されてる。そろそろ高校二年生。以上」

「ご丁寧な自己紹介をどうも。榎原さんは男好きなんですか。そうは見えませんがねえ」

「……あっそ。これでアンタ あー…先生の、用事は終わった訳ね。じゃ、あたしは帰るから」

木にくるりと背を向ける。

これで続かない会話も終了。

さっさと男共のところに行こう。

それで、この出来事を笑い飛ばそう。

『超ウケる話があるんだけどさ、聞きたい?…実は、あたしのことナンパした教師が居るんだよね、笑えるー!』

こんな調子で話せば、男共は下品に笑うだろう。

あ、でも、たかのんはナンパとか嫌いだから、怒るかもなあ。

『槇をナンパ?どこのどいつだ。落とし前つけてきてやる』
とか言いそうだし。

たかのんとは、最近知り合った。

あたしが男共とばかり遊んでいるという噂を聞きつけたらしい。
何故かあたしを気に入ってくれて、何故かあたしの面倒を見てくれて、何故かあたしには優しくしてくれる。

「槇原さん、ちょっと待ってください」

あたしの楽しい想像をぶち壊す声。

いらだちながら振り向くと、先生がじつとあたしを見ていた。

痛い程の視線を感じて、あたしが戸惑っていると、先生があたしの方へと歩み寄ってくる。

「な、何よ。セクハラとかしたら、ただじゃおかないわよ」

「セクハラ?なるほど、なるほど」

「何かなるほどのよ!」

意味わかんない。

だいたい、呼び止めたなら呼び止めたで、用件を早く言えっつーの。

「槇原さん」

急に、先生の目が細められた。

その目は、冷気を帯びていて。

あたしは、背筋が凍るのを感じた。

「きちんと、笑えるようになるといいですね」

一瞬、何を言っているのかわからなかった。

きちんと？

笑えるように？

何がだ。

あたしが、笑っていないとでも？

…いや、そんなことはないはずだ。

あたしはきちんと笑えている。

男友達と、くだらない話をして、げらげらと、豪快に。

……大丈夫だ。

あたしは、きちんと笑えている。

「何のことを言っているのかサッパリわかんないわ」

「それならいいんです。でも、」

“無理して笑うのは疲れるでしょう”。

疑問系じゃなく、決めつけられた。

あたしは、無理してなんかない。
疲れてなんかない。
だってあたしは、だって、だって。

「…ばっ」

ばっかじゃないの。
口に出してそう言うのはさすがに憚られた。
何もかも、お見通しな気がして。
先生の目が、また優しい光を灯す。

「馬鹿ですね。ほんと、馬鹿ですよ」

その言葉は、あたしに向けられた言葉。
それを聞いた瞬間、はつきりと自覚した。

あたし、無理してたんだ。
男友達と遊ぶのは楽しくて、楽で、それでいて疲れた。
男女の壁は高すぎて、とてもじゃないが超えられない。
それでも、今更女子のグループに混ざるのは無理だった。
そんなの、あたしのプライドが許す訳ない。

「馬鹿で、何が悪いの」

「何も悪くないです。でも、槇原さんは本当は頭がいい」

そう言って、先生は柔らかく微笑んだ。
さっきの冷たい視線とは麻逆の視線。
春風が吹き、葉が舞う。

「だから、ときどき、馬鹿で居ることが苦しくなる。それならば、

僕の所に来てください」

“存分に笑ってください”

先生の言葉が胸にすんと落ちた。

それと同時に、つまっていた重いものも、胸の奥に落ちていく。

ああ。

なんだ、簡単じゃない。

あたしは、笑っていられる場所を見つけられればいいんだ。

男友達と一緒に居るのは楽で、だけどときどき疲れてしまう。

そんなとき、あたしは、自分だけの居場所で、思いつきり笑えばいいんだ。

その後、あたしが英語の授業にだけはまめに顔を出すようになってきたことは、言うまでもないだろう。

06・続かない会話(後書き)

諸事情により更新スピードアップです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286y/>

恋唄

2011年12月11日15時50分発行